

2015 年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2015 年度の学会賞が決定し、第 63 回秋季大会期間中の 2015 年 9 月 19 日に、久留米大学御井キャンパスにおいて授賞式が行われました。学術賞として、中村剛会員（関西福祉大学）が選ばれ、奨励賞としては、著書部門から郭芳会員（同志社大学）、論文部門からは任貞美会員（同志社大学）が選ばれました。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



後列左から牧里委員、古川委員長、任会員、太田委員、大友委員
前列左から中村会員、郭会員

◆ 学術賞（著書部門） 中村 剛（関西福祉大学）

受賞作：『福祉哲学の継承と再生—社会福祉の経験をいま問い直す』
（ミネルヴァ書房、2014 年 3 月 20 日刊）

社会福祉学の研究領域および方法は多様であり、その成果の優劣を比較することはほとんど不可能な作業といえるでしょう。そうしたなかで、拙著を学術賞に選んでいただいた理由を、受賞の喜びと同時に考えています。

講評としていただいた言葉を踏まえ、理由と思われる点をいくつか書き出してみます。1 つめは、阿部志郎先生や小倉襄二先生といった、社会福祉学が今後も学び続けなければならない先覚者の哲学と思想を継承しようとしている点です。2 つめは、福祉哲学という営みを体系的に示した点です。3 つめは、ロゴスとは異なるダーバールという言葉を見出し、その言葉によって拓かれる思考の次元を示した点です。4 つめは、講評のなかで「中村社会福祉学」と表現していただきましたが、社会福祉学構想の萌芽が感じられる点です。

このように書き出した中から感じられることは、科学だけでは収まりきれない部分を、社会福祉学の中に位置づけようとする点に対する“励まし”です。そして、今回拙著を選んでいただいた



左から岩田会長、中村会員、古川委員長

理由は、「科学だけでは対応できない領域や次元を含めた社会福祉学の可能性」を示唆した点ではないかと思っています。

日本社会福祉学会を創設した人たちの願いがあり、学会賞を創設して下さった先生方がいます。今回の受賞の背景にはそうした歴史があります。自分もその歴史の中にいること、そこには様々な願いがあること、そのことに改めて思いを馳せ、今後の研究に取り組みたいと思います。

最後になりましたが、大阪大学 浜渦辰二教授、東京福祉大学 秋山智久教授、釜ヶ崎で日雇い労働者に学びながら聖書の読み直しをされている本田哲郎神父、ミネルヴァ書房編集部 戸田隆之様、そして、審査委員会委員長 古川孝順教授と審査委員の先生方に、心より感謝申し上げます。

◆ 奨励賞（著書部門） 郭 芳（同志社大学）

**受賞作：『中国農村地域における高齢者福祉サービス—小規模多機能ケアの構築に向けて—』
（明石書店、2014年11月30日刊）**

この度、社会福祉学会第63回学会奨励賞に選出されて、誠に光栄に存じます。まず、学会ならびに選考委員の先生方に厚くお礼申し上げます。そして、日本に来てから私を一から鍛え上げ、ここまで導いてくださった修士課程指導教員の丹波史紀先生と博士課程指導教員埋橋孝文先生にも心から感謝いたします。

私は日本の高齢者福祉政策の経験を中国に移転できるのではないかという大きな問題関心をもち、これまで中国農村地域における高齢者福祉サービスに関する研究を進めてまいりました。

日本の小規模多機能ケアを参考に「村宅老所」サービスモデルを構築しました。小規模多機能ケアに注目した理由は小規模多機能ケアが住み慣れた地域での生活を継続することができるサービスであるためです。現地調査から中国の農村高齢者は施設入所に抵抗が強かったことがわかりました。また、日本にきてから、日本より中国の農村地域では隣人への相互扶助がまだ多く残っているのではないかと感じましたので、中国農村の高齢化問題を解決するには、全国的に統一な介護保険制度の制定を待つのではなく、農村地域の中で「内発的発展」の視点からサービスを考えたほうがよいのではないかと考えて本書を書きました。

今回受賞した本は私が提出した博士学位請求論文の公刊書になります。このたびの論文を書き上げるにあたっては、多くの方々のご学恩にあずかりました。また指導教員以外に何人かの先生からは、公刊後に丁寧なコメントを賜りました。本の随所に、おひとりおひとりのお言葉が思い返されます。ここにあらためて深く感謝もうしあげますとともに、このような学術文化の恩恵に浴した1人として、その継承に努める責任を感じております。今後、審査員の先生にご指摘された課題を克服するため、日本の高齢者福祉サービスの経験を中国に移転できるように、今回の学会賞を原動力にして頑張りたいと思っています。

最後にあらためて、この一生に一度の素晴らしい機会に感謝の気持ちを表します。



左から岩田会長、郭会員、古川委員長

◆ 奨励賞（論文部門） 任 貞美（同志社大学）

受賞作：「介護職員の虐待認識に基づいた高齢者虐待定義の再構築への試み―「準虐待」の構造と特徴に着目して―」

（『社会福祉学』54 巻 4 号、2014 年 2 月 28 日発行）

同志社大学大学院に所属している任貞美と申します。この度、日本社会福祉学会の奨励賞という名誉ある賞をいただき大変光栄に思っております。選考委員の先生方には、丁寧に読んでいただき、講評を通して貴重なご意見やご指摘をいただけたこと、深く感謝申し上げます。



左から岩田会長、任会員、古川委員長

私が日本での留学を決めたのは、韓国でソーシャルワーカーとして高齢者と接しながら働いた時が楽しかったため、実践に繋げる理論を学びたいという思いがきっかけになったといえます。老人演劇ボランティア団体を作って全国の老人会館等でボランティア活動を行ったり、そのような活動を通して老人自らが作り上げていく新老年文化を支えていく役割を担っていることに大変興味深く、また、生きがいを感じました。高齢者も他の人と変わらないニーズや学習能力及び潜在能力を有している、ということに気づき、より専門性のある実践をしていくために、さらなる勉強が必要と思いました。

今回受賞した論文もそのような私の心の繋がりの上で完成されたものといえます。ソーシャルワーカーとして働いてきた私が、介護現場で何事もせず 365 日フロアに座っている高齢者の姿を見たとき、「この姿は本当の意味での生活といえるだろうか、地域の資源・ボランティア団体を活用して高齢者たちを外に連れ出してあげられないのか？ 障害者は施設に入所していても活動補助員を通して自分がやりたいこと、いきたいことに付き添ってもらっているのに、なぜ高齢者はそのような生活ができないのか」ということに、疑問を感じました。

その結果、もしかしたら、高齢者虐待防止法において高齢者虐待と定義づけられているもの以外にも虐待あるいは「準虐待」と捉え、改善しなければならない生活環境や介護行為があるのではないかとこの視点にたどり着くことになりました。

今回の受賞は、今後ますます研究に励むようにという激励のメッセージをいただいたと思っております。これからも尊厳のある高齢者の生活を支えるために高齢者や実践家の意見を大事にしながらか研究を積み重ねていけるよう、努力を続けたいと思います。

最後に、何事でもやってみることが大事であると常に励ましてくださる指導教員の埋橋孝文教授に心より深く、御礼申し上げます。また、様々な視点からよりよい研究ができるようにご指導を下さった中島健一先生、山田裕子先生及び同志社大学の先生方に深く感謝を申し上げます。調査にご協力頂きました全国の介護職員の皆さまにもこの場をお借りして改めて深く感謝を申し上げます。